

研究紀要・年報

縄文の森から

From JOMON NO MORI

第4号

《研究ノート》

土器胎土の鉱物を求めて2
調査第二課 第二調査係

城ヶ尾遺跡の再検討
馬籠亮道・長野眞一

剥片尖頭器石器群とその前後の石器群について
宮田 栄二

九州における縄文時代の二つの耳飾り
新東 晃一

戦争遺跡に関する考察
抜水 茂樹

《資料集成》

鹿児島県出土土師器の法量データベース2
調査第一課 第一調査係

科学分析報告一覧
南の縄文調査室

《年報 平成16年度》

鹿児島県立埋蔵文化財センター
2006.3

目 次

《研究ノート》	
土器胎土の鋳物を求めて2	
- 土器製作推定地のための基礎研究 -	調査第二課 第二調査係 1
城ヶ尾遺跡の再検討	馬籠亮道・長野真一 9
剥片尖頭器石器群とその前後の石器群について	
- 南九州における最新の調査成果から -	宮 田 栄 二 27
九州における縄文時代の二つの耳飾り	
- 九州の玦状耳飾と耳栓について -	新 東 晃 一 37
戦争遺跡に関する考察	
- 鹿児島県における戦争遺跡の意義とその活用方法について -	
	抜 水 茂 樹 45
《資料集成》	
鹿児島県出土土師器の法量データベース2	調査第一課 第一調査係 55
科学分析報告一覧	南の縄文調査室 66
《年報 平成16年度》 70
研究紀要・年報『縄文の森から』創刊号～第3号 目録 75

研究紀要

剥片尖頭器石器群とその前後の石器群について

- 南九州における最新の調査成果から -

宮田 栄二

An assemblage of stone tools including tanged points and
another assemblages of the time around it

Miyata Eiji

要旨

剥片尖頭器石器群と、その前後の時期の石器群について明らかにし、石器群の細かな変遷を具体的に示した。そして剥片尖頭器石器群が極めて短期間に終息した背景と、かわって基部加工ナイフ形石器及び今峠型ナイフ形石器の製作が開始される要因を石材消費戦略の変化から考察した。

キーワード 後期旧石器時代後半期、剥片尖頭器、ナイフ形石器、石器群編年

1 はじめに

昭和51年(1976)に発掘調査が行われた指宿市所在の小牧3A遺跡は、AT上位の石器群であり、多種の器種からなる多量の出土遺物で注目された。石器組成として、大型や小型のナイフ形石器、剥片尖頭器、小型の三稜尖頭器、粘板岩素材の両面加工尖頭器、小型の台形石器、搔器、削器などほとんどの器種がそろっていた。

この当時、南九州においてナイフ形石器文化期の調査例は極めて少なく、また調査後まもなく出土石器群の紹介がなされたこともあり(長野1979)、南九州AT上位石器群を代表する遺跡となり、これらの多種多様な石器組成が南九州AT上位の基準資料とされた。その後、約15年間鹿児島県内では、狭い調査面積で遺物量が少ない遺跡の調査がわずかに実施されたに過ぎず、南九州の石器群はそのまま小牧3Aの石器群であった。ようやく1990年になり、鹿屋市所在の西丸尾遺跡の調査が実施された。VIIIb層がAT上位のナイフ形石器文化期であり、基部加工ナイフ、今峠型ナイフ、両面加工尖頭器などが出土した。この遺物包含層の上位に桜島を起源とするP15もしくはP17とされる火山噴出物が認められ、これらの噴出年代から約18,000年前の石器群と考えられた。この石器群では両面加工石器の存在は小牧3Aと共通していたものの、ノッチ状に基部整形した明確な剥片尖頭器は認められないという違いがあった。

1993年から鹿児島市仁田尾遺跡の調査が3年かけて実施され、そこでは狸谷型ナイフが主体であり多量に出土した。これ以降ナイフ形石器文化期の遺跡数は増加したが、小牧3A遺跡の石器群と共通する多種多様な石器組成をもつ石器群は発見されていない。筆者

は、1995年にAT以後の南九州ナイフ形石器文化期の編年を行い、片田・金剛寺原第1段階→仁田尾・狸谷段階→小牧3A・西丸尾段階→木場A2段階→露重段階とした。この露重段階の小型ナイフと小型台形石器の石器群には、小牧3A遺跡石器群の一部(小型ナイフと小型台形石器)が形態的に、また製作技術的に含まれるとした。(宮田1995a, 1995b)ただしこの時点で筆者は剥片尖頭器と三稜尖頭器の共伴は当然のこととして疑うこともなかった。

ところが近年の東九州道建設に伴う大隅半島北部の旧末吉町、旧財部町(現、曾於市)所在の桐木遺跡、桐木耳取遺跡の調査により南九州石器群の既成概念を

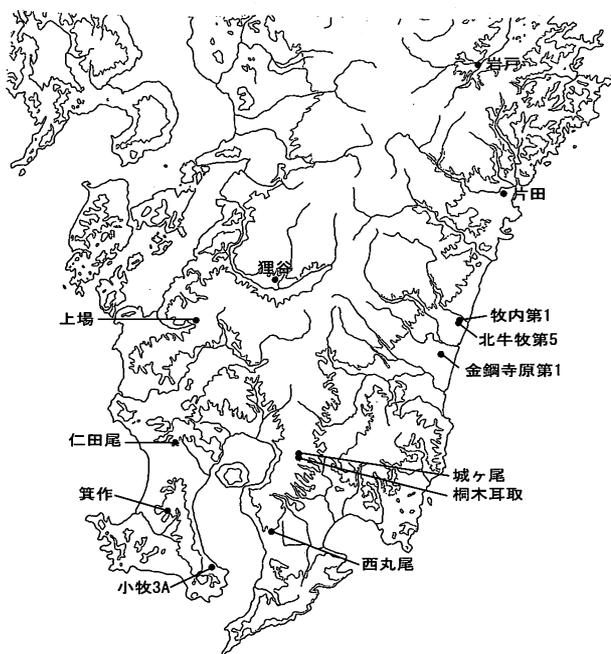


図1 本稿と関連する遺跡

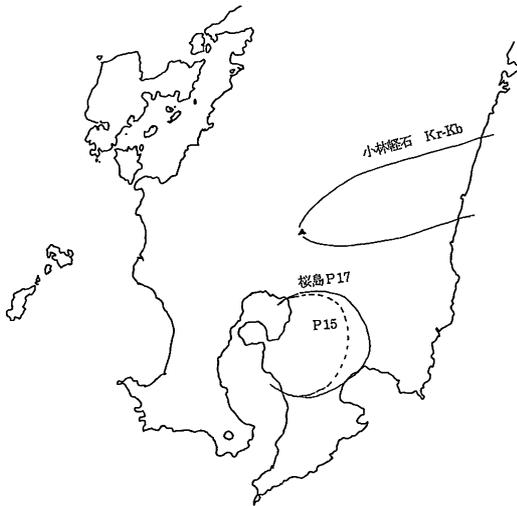


図2 AT上位のテフラ
(森脇1994, 町田・新井2003)より作成

くつがえす新たな展開を迎えることとなった。大隅半島北部地域は土層堆積が良好であり、薩摩半島では薩摩火山灰(P14)からシラスまで50cm程度しか堆積していなかった土層が2mを越えており、加えてその間層にP15, P17などの桜島起源テフラが明確に認められた。これにより混在のない剥片尖頭器石器群などが確認され、逆にこれまでの石器群が連続する複合時期の所産である可能性が推定できるようになった。

本稿は剥片尖頭器石器群と、その前後について編年を行い、石器群の変遷背景の一端を明らかにする。

2 最近の調査成果から

(1) 桐木耳取遺跡 I 文化層

桐木耳取遺跡、城ヶ尾遺跡、前原和田遺跡などが所在する大隅半島北部は桜島の北部に位置していることから、桜島起源の噴出物であるP15, P17などのテフラが明瞭に堆積していた。P15は約21,000年前、P17は約23,000年前の噴出年代(奥野・福島・小林2000)が推定されており、これらの上下の位置で異なる石器群が発見されることとなった。P15の上位では城ヶ尾遺跡II文化層や前原和田遺跡XIII層のように三稜尖頭器が主体となる石器群が、そしてP17の下位では桐木耳取遺跡I文化層のように剥片尖頭器を主体とする石器群などが検出され、これらの三稜尖頭器石器群と剥片尖頭器石器群とは大きく異なる時期であることが明らかとなった。

城ヶ尾遺跡II文化層では、全長10cm程度の大型品や5~6cm程度の中型品を中心とする三稜尖頭器が主体であり、少量の二側縁加工ナイフ形石器や削器などが相伴している。また前原和田遺跡XIII層も三稜尖頭器が主体となる石器群であり、他に二側縁加工や部分加工のナイフ形石器などが相伴している。

一方、桐木耳取遺跡ではP15テフラが同様に第XIV層に認められ、P17テフラが第XVI層に堆積しており、

第XVI層~第XVII層出土の石器群が桐木耳取遺跡I文化層とされた。またP15上位の第XIII層が第II文化層であり、小型ナイフ形石器と小型台形石器の石器群である。桐木耳取遺跡は前年度に報告書が刊行された桐木遺跡(中原2004)と事業者が異なるだけの隣接する同遺跡である。桐木耳取I文化層は調査区域が南北300m以上と広く、出土遺物の分布から多くのブロックとその集合であるエリアが認識されている。ところがエリアごとに主体となる器種と構成の差異が認められた。

石器群ブロックやエリア(ユニット)の分析と解釈については、砂川遺跡の分析(安森1992)以後、ブロックの形成などに関する分析はあまり行われていない。

桐木耳取I文化層の石器群エリアに関しては、以下のような石器群の違いや、使用石材の差異などからわずかに時期の異なるものと判断できる

具体的に各々のエリアの石器群を概観してみる(図3)。2~5エリアの剥片尖頭器は先細りの石刃状の縦長剥片を使用し、打面近くの両側縁をノッチ状に調整加工して基部とするものや、片側縁辺全体に二次加工を施したものなどが多い。他の器種は縦長剥片素材の削器がみられる程度であり、きわめて貧弱な内容である。

北側の12エリアは、縦長剥片の打面を残して、打面近くの両側縁に直線的な調整加工を施して基部とする基部加工ナイフ形石器と、「ノの字」形剥片を使用し打面近くになわずかな調整加工が施された今峠型ナイフ形石器が石器群の主体となっている。基部加工ナイフに使用される縦長剥片は、剥片尖頭器に使用されるものと同様先細りの剥片であるが、比較的小型で規格的にそろっている。

一方、11エリアは台形石器を主体とする石器群であり、剥片尖頭器や基部加工ナイフ形石器あるいは今峠型ナイフ形石器は認められない。この台形石器石器群も剥片尖頭器に後続する石器群であるが、別稿にゆずることとし本稿では触れない。

このように各エリアにより異なる石器群は、使用される石材も剥片尖頭器が安山岩や頁岩であるのに対し、台形石器に使用される石材はギョクズイ・メノウ系であり差異が認められる。また剥片尖頭器石器群は出土層が第XVII層であり、基部加工ナイフ形石器・今峠ナイフ形石器の石器群あるいは台形石器石器群などがXVI層からの出土が中心という層位的な差異も認められる。以上のことからこれらの石器群は時期がわずかに異なるものと判断される。

(2) 箕作遺跡

箕作遺跡は薩摩半島南部に位置する旧金峰町に所在しており、シラス(入戸火砕流)直上のVIII層でナイ

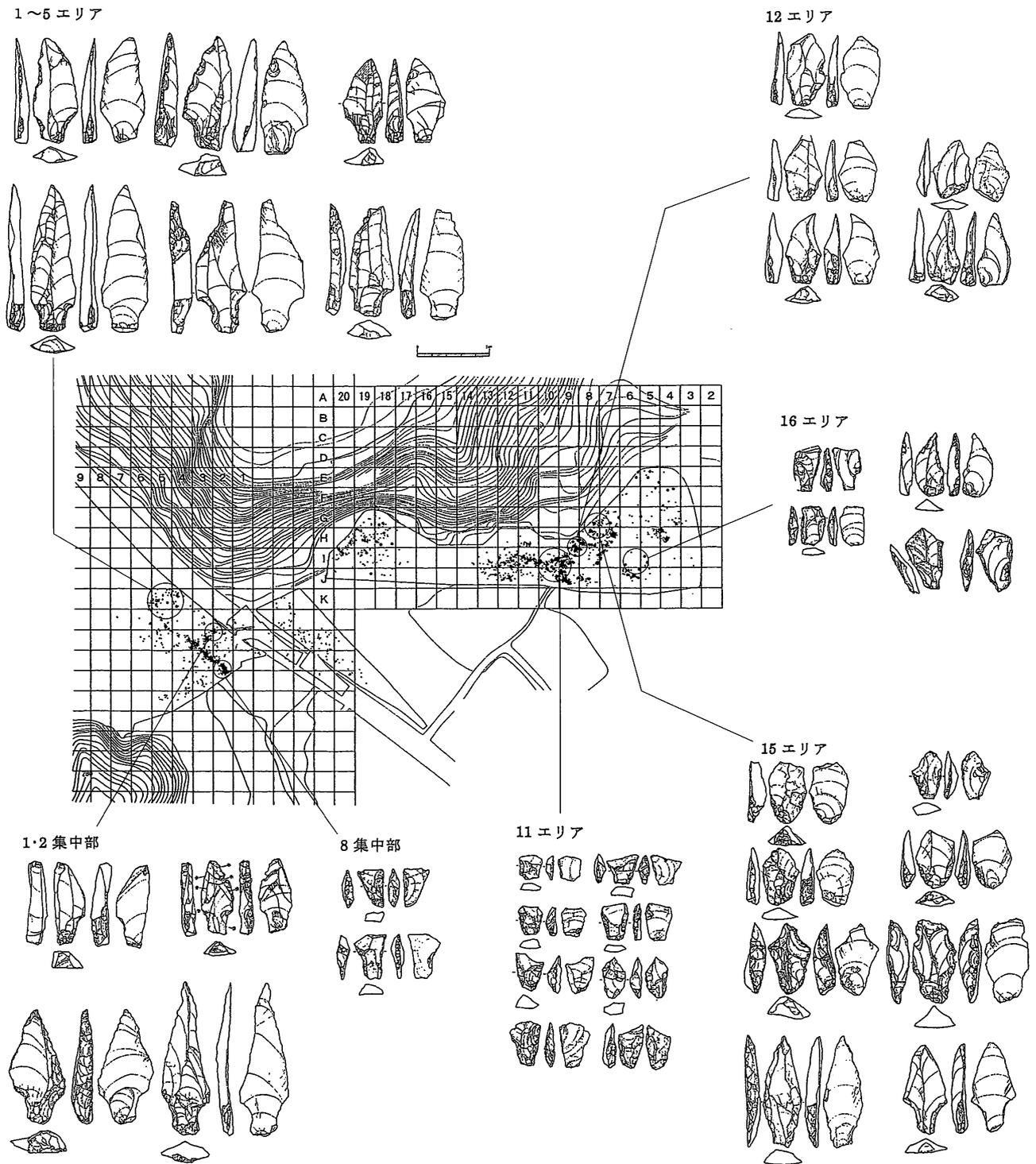


図3 桐木, 桐木耳取遺跡 I 文化層の石器群

フ形石器文化の石器群が検出された。石器群は離れた位置にあるブロック1と、ブロック2・ブロック3からなるユニット1、それにブロック4・5・6から構成されるユニット2が識別されている。出土した石器は、幅広剥片を素材として剥片の打面部に急角度の刃潰し整形加工を施して背縁とする切出し形の狸谷型ナイフが主体で、他には搔器などが共伴している。石核

は打面と作業面を転移しながら剥片を製作する多面体の石核や、剥片を素材としその平坦面を剥ぐもの、あるいは剥片を素材としてその小口部分から剥ぐもの、また周囲から求心状に剥ぐものなどが認められる。これらの石核から幅広剥片が生産されナイフ形石器などに使用されている。石材は頁岩が主体であり、少量の上牛鼻産黒曜石とチャート・ギョクズイが使用されて

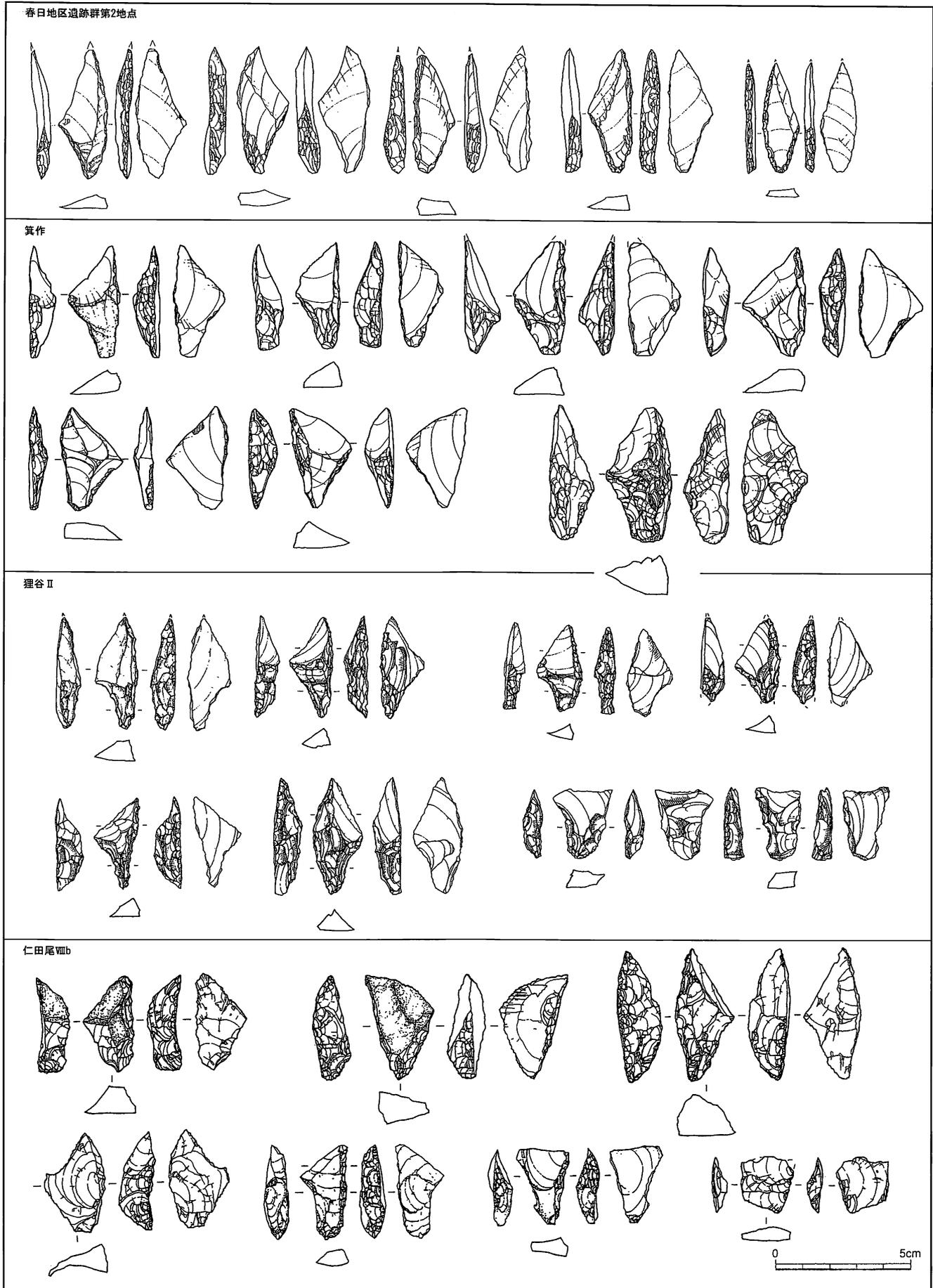


図4 剥片尖頭器以前の石器群

いる。三船産黒曜石は全く出土していない。剥片尖頭器と三稜尖頭器は全く出土していない。このことは、狸谷Ⅱ石器文化の石器組成について、検討が必要であることを示唆している。

(3) 牧内第1遺跡(四次調査)

牧内第1遺跡は宮崎県高鍋町に所在し、約15,000年前の小林軽石の下位にAT下位石器群を含む4時期の旧石器時代石器群が検出されている。AT直上のⅧa層が包含層となるⅡ期では、直線状に並ぶ9基の礫群と3ヵ所のブロックが検出された。このなかで石器ブロック③では狸谷型ナイフ形石器が12点出土している。ナイフ形石器は頁岩や流紋岩が使用され、比較的厚みのある幅広剥片の側縁部を刃部とし、剥片の打面部を大きく取り除くようにブランディングが施され、また対辺はノッチ状のブランディングにより調整加工され切出し形のナイフ形石器に仕上げている。ブランディングは腹面からのみでなく背面からも行われており、基本的な狸谷型と判断できる。共伴している石核は小礫素材で打面と作業面を入れ替えながら剥片を剥ぐものと、打面と作業面を転移させながら連続して幅広で短い剥片を生産するものが出土している。この石器群でも剥片尖頭器と三稜尖頭器は認められないということは大きな特徴といえよう。

3 剥片尖頭器石器群とその前後

九州旧石器時代研究を長くリードしている木崎康弘は、AT上位を大きくⅢ期として区分し、そのなかで初頭、前半、後半とに細分している。(木崎1988・1994・2002)。Ⅲ期初頭として岩戸D、片田石器文化を入れ、二側縁加工ナイフ(茂呂型)に、岩戸D出土例のような剥片尖頭器が出現し、そして片田遺跡出土例などのような三稜尖頭器が現れる段階としている。次にⅢ期前半については、多くの遺跡が該当するとしており南九州の遺跡では狸谷Ⅱ石器文化、大丸・藤ノ迫石器文化、天道ヶ尾石器文化、石清水石器文化、小牧3A石器文化、仁田尾Ⅷb層石器文化、前山8層石器文化、赤木I石器文化などが挙げられている。石器にはナイフ形石器、三稜尖頭器、槍先形尖頭器、搔器、削器、彫器、揉錐器、礫器、磨石・敲石などがあり、「ナイフ形石器形態組成には、基部加工ナイフ、斜軸形ナイフ、切出型ナイフ、台形ナイフ、台形様ナイフ、剥片尖頭器及び国府型ナイフ形石器による構成」があるものとしている。そしてⅢ期後半として宗原石器文化、岩戸6上石器文化、前田ⅩⅡ石器文化、五馬大坪石器文化、片島道下遺跡、今峠遺跡、鼓ヶ峯石器文化、西丸尾Ⅷ層石器文化、成岡遺跡、船野石器文化、金剛寺原第2石器文化などが該当するとし、石器組成の特徴は剥片尖頭器を伴わないところであるとして、「基部加工ナイフ、斜軸形ナイフ、打面残置の二側縁加工のナイフ、切出形ナイフ、台形ナイフ及び台形様ナイフなどのナイフ形態組成があり」、三稜尖頭器、槍先形尖頭器などの石器を含むとしている。Ⅳ期はナイフ形石器文化の最終末期にあたりとし、提西牟田Ⅳ石器文化をあげ、「ナイフ形石器の形態組成が柳葉形ナイフ、部分加工ナイフ、基部加工形ナイフ、切出形ナイフ、台形ナイフ及び、台形様ナイフ」とし、石器組成はナイフ形石器と細石器などとしている(木崎2002)。

筆者のナイフ形石器文化全体の編年については、別稿にゆずることとして¹⁾、本稿では剥片尖頭器とその前後の時期に焦点をしばり検討していく。

(1) 剥片尖頭器以前

AT直上期の石器群として、筆者も片田遺跡や金剛寺原第1遺跡の二側縁加工ナイフ形石器をもつ石器群を比定(橋1990)しているが、最新の資料として春日地区遺跡群第2地点(加藤ほか2003)をとりあげたい。そこでは、縦長剥片を素材とし打面を断ち切るような二側縁加工ナイフや一側縁加工ナイフが主体で、AT直下の系統を引く柳葉形のナイフと共に切出し形のナイフも認められている(図4)。ほかに搔器や削器などを伴っているが、ここでは剥片尖頭器や三稜尖頭器は認められない。片田遺跡の三稜尖頭器は同じ層の出土ではなく、また岩戸Dにおける石器組成について、後述べる理由から、複数の時期からなる混在の可能性が高いと考えている。

そして次の時期に、剥片尖頭器石器群直前の時期の石器群として狸谷型ナイフ形石器を主体とする石器群が位置づけられる(宮田1995、桑波田・宮田1997)。

狸谷型ナイフ(松藤1992)は厚みのある幅広剥片を素材とし、主に剥片の側縁を刃部にすることから、剥片の大部分はブランディングにより除去・整形される。ブランディングは急角度の刃潰しが主で、全体形状は斜刃の切出し形となる。素材に厚みのある剥片を使用するため、ブランディングは腹面からだけでなく背面からも行われる場合が多く、狸谷型ナイフの特徴の一つとなる。切出し形のナイフ形石器はAT直上期の全国的に共通する特徴ともいえる。

箕作遺跡や牧内第1遺跡Ⅱ期の各石器群組成から判断できるように、狸谷型ナイフを主体とする時期も剥片尖頭器や三稜尖頭器は伴わないことが明らかである。狸谷Ⅱ石器文化では1点の剥片尖頭器と数点の三稜尖頭器を共伴するとされていたが、出土分布を詳細に検討した岩谷史記はそれが複数の時期の所産であることを指摘している(岩谷1998)。なお大分県駒方津室迫遺跡でも狸谷型ナイフが出土しているが、ここでも剥片尖頭器と三稜尖頭器は共伴していない。

狸谷型ナイフの石器群は、使用される石材が遺跡の

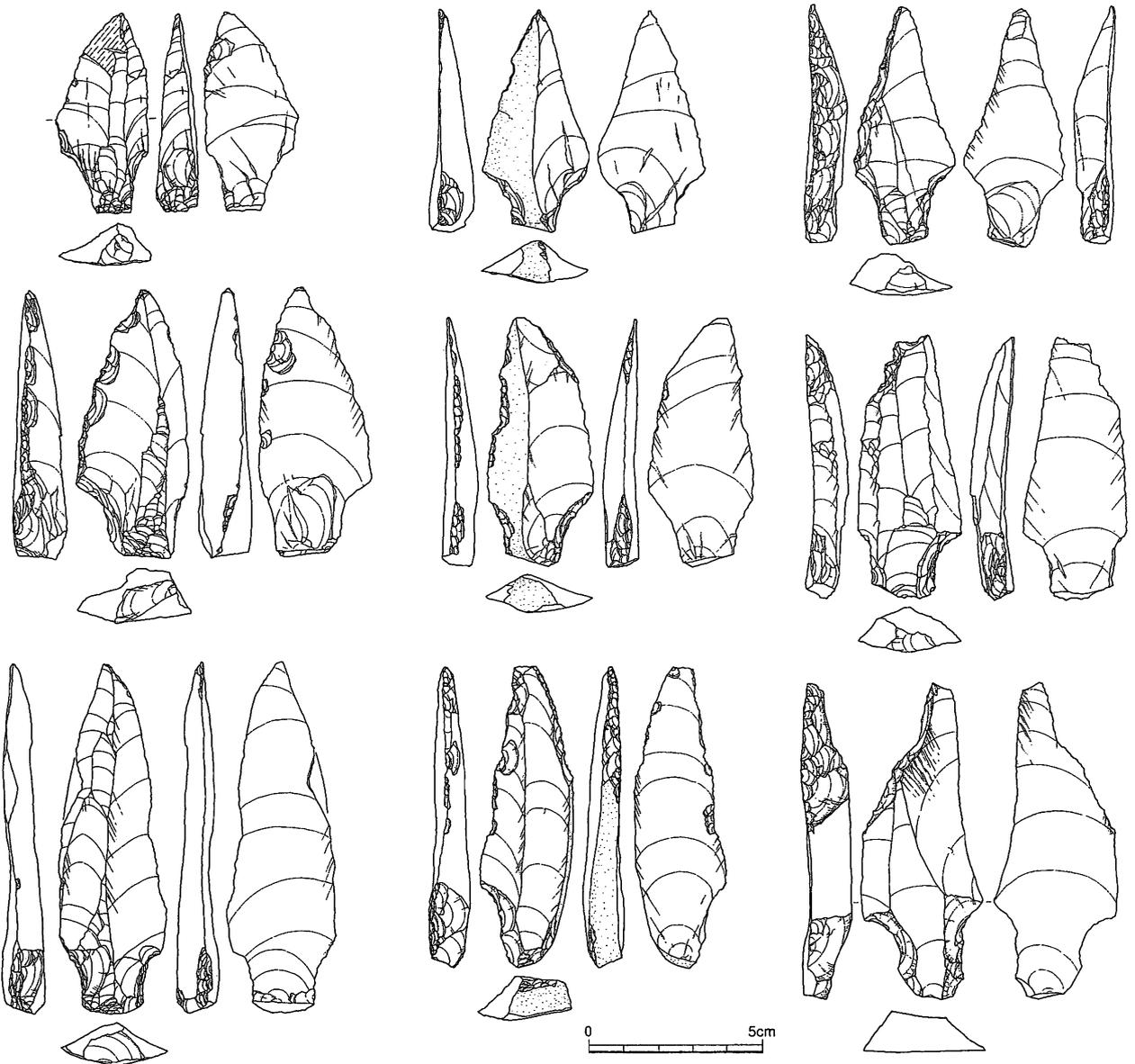


図5 剥片尖頭器石器群(桐木耳取Ⅰ 2~5エリア)

近辺で確保できるものであり、遺跡内で製作から廃棄までの過程が確認できるところに特徴がある。

(2) 剥片尖頭器石器群

一般的に剥片尖頭器をもつ石器群、あるいは剥片尖頭器を含む石器群と呼ばれ、木崎編年のⅢ期前半で示されるように、これまで剥片尖頭器石器群は各種のナイフ形石器や三稜尖頭器を含むとされてきた。

ここでは桐木耳取遺跡Ⅰ文化層の2~5エリア出土石器群を基準とする。(図5) 2~5エリアは桐木遺跡部分に相当し、そのなかには9ヶ所の小ブロックが認識されている。出土遺物は剥片尖頭器、削器、搔器、敲石などであり、三稜尖頭器は出土していない。剥片尖頭器は長さ10 cm程度の大型品も多く、基部加工は打面近くの両側縁をノッチ状に整形加工し、基部整形はていねいである。剥片尖頭器は共伴している剥片やチ

ップと石材が異なり、遺跡内で製作の痕跡は認められず、搬入品と判断される。剥片尖頭器が搬入品であることは、これまで多くの遺跡で確認されている特徴である。

幅広剥片の生産と利用による狸谷型ナイフから、石刃状の縦長剥片素材という剥片尖頭器への突然の剥片剥離技術の変化と、各遺跡で主要石器が生産されないという構造的な変化は系統的発展ではなく、松藤和人が指摘するように韓半島からの波及の結果と考えられる(松藤 1987)。剥片尖頭器は急速に九州全域に拡散するが、桐木耳取遺跡Ⅰ文化層にみられるように比較的短期間で幕を閉じることとなる。剥片尖頭器は各遺跡で生産過程が認められないことから、特定の原産地などで集中的に生産されていたことになる。そのことは当該期の生業活動に支障を伴うことが予想され、

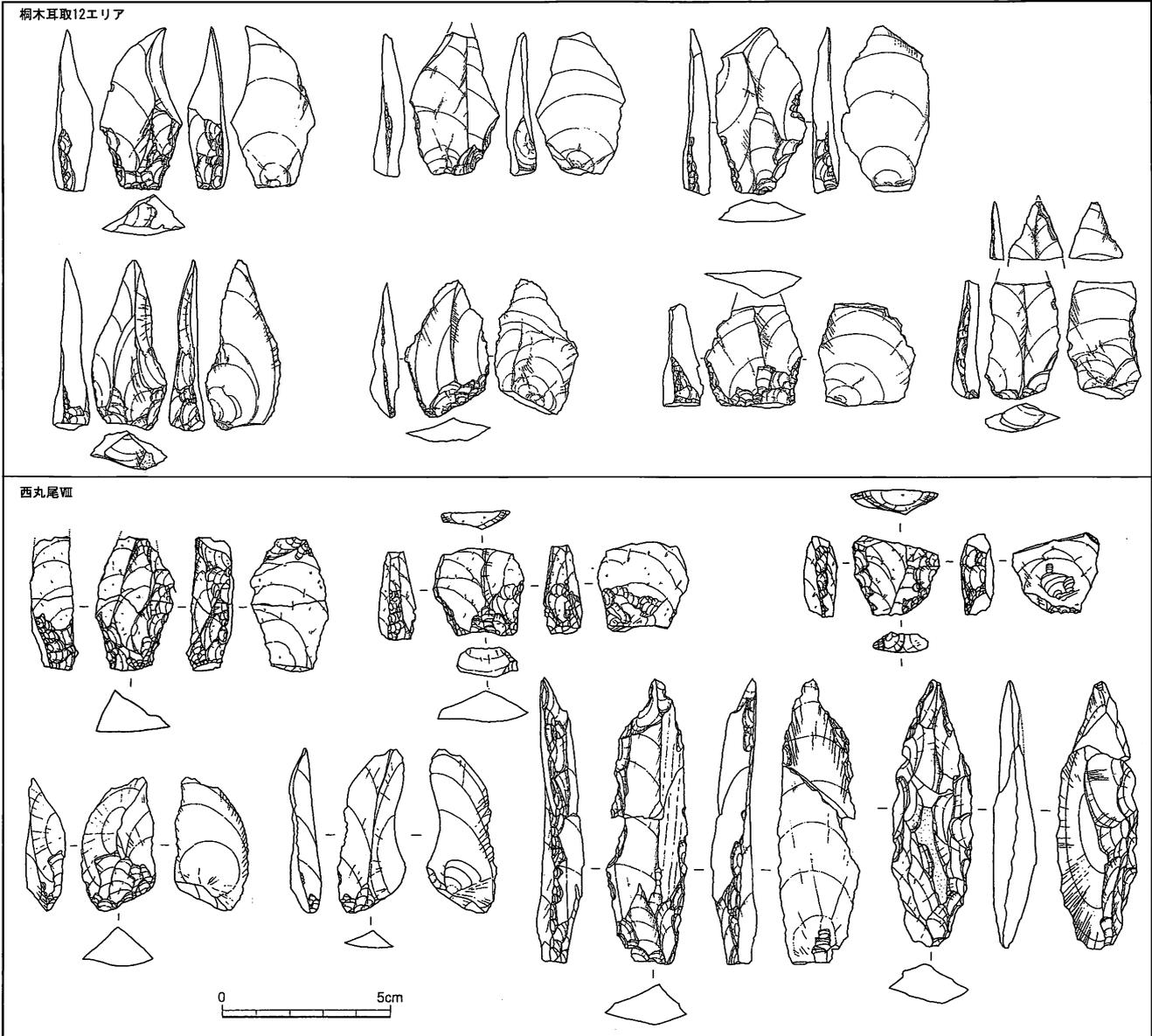


図6 剥片尖頭器以後の石器群(1)

長期間継続できなかったことが推測される。つまり、剥片尖頭器は安山岩などの特定の石材を使用するため、石材産地とともに石器製作地が限られ、また大型で厚みのある打面で先細りの剥片を必要とするが、このような剥片は連続的に剥離生産できない。さらに大型石核の場合持ち運びも不便である。このように石器製作から使用・廃棄にいたる石器群構造が、前時期から質的に大きく変化したことに対応する手段として当該期に石器再加工（リダクション）が多く認められる（宮田剛 2005）結果となっている。すなわち石材消費コストが高くつくことも剥片尖頭器石器群が速く終息する原因の一つと考えられる。

阿部敬は東南九州の剥片尖頭器石器群から三稜尖頭器石器群への変化を、技術構造の変容で理解し、石材消費という視点から「リダクション戦略」を媒介した

ものであるとしている（阿部 2005）。しかし、石器群の変化は技術構造の変容であるにしても、リダクション戦略はその一部分に過ぎない。目的とする原石獲得や使用石材の変化などを含む生業活動全体や行動領域あるいは狩猟方法など多岐に及ぶ変化に対する柔軟な適応結果によるものであると考える。このことは次の時期に石器群技術構造の新たな再変化が認められることで確認できる。

（3）剥片尖頭器以後の石器群

桐木耳取遺跡Ⅰ文化層の北側エリアに位置する12エリアの石器群を基準とする。石器組成は打面を残す基部加工ナイフ形石器と今峠ナイフ形石器と削器などである。12エリアは2つのブロックから構成され、黒曜石の石核及び剥片やチップが多く、ナイフ形石器は頁岩が多用されている。石核と基部加工ナイフ形石器

の接合資料が認められることから、遺跡内で製作されていることが明らかである。基部加工ナイフ形石器は先細りの縦長剥片が使用され、平坦な打面を残して打面近くの両側縁を直線状に整形加工を施し基部とする。長さは5 cm程度にまとまっている。素材剥片の形状や整形加工部位は剥片尖頭器と共通しているが、石材消費を考慮するために剥片尖頭器よりも剥片の規格が小さくまとまっており、小型の石核でも製作可能となった。整形加工はノッチ状ではなく、直線的に施され、調整角度も急角度ではなくスクレイパー・エッジ状となる(図6上段)。

剥片尖頭器と基部加工ナイフ形石器を比較すると、後者は前者が形骸化したものと考えられ形式変化と理解される(稲原 1986・木崎 1988)が、単なる変化ではなく、使用する石材が多様化するところに剥片尖頭器と異なる特徴的な意義を認める必要がある。

今峠型ナイフ形石器は「ノの字」形剥片が使用され、打面の背面を頭部調整状に加工し、打面近くの両側縁にわずかに調整加工を施している。このような今峠型ナイフは綿貫俊一により今峠類型(綿貫 1989)と呼称されているものである。

同様の基部加工ナイフと今峠型ナイフが共伴して出土しているのが西丸尾遺跡Ⅷb層である。西丸尾Ⅷb層では粘板岩や黒曜石製の基部加工ナイフ形石器²⁾と頁岩製の今峠類型今峠型ナイフが出土し、他に大型の二側縁加工ナイフと台形石器などが出土している(図6下段)。黒曜石製の基部加工ナイフは全て基部のみの欠損品であり、遺跡内で柄に新しい石器を交換したことが推定される。なお、基部加工ナイフに使用された黒曜石は、最近になり藁哲男氏に産地分析をしていただいた結果、日東産と判明した。粘板岩製の基部加工ナイフは欠損後再加工されている。粘板岩は遺跡に近い高隈山で産出しており、出土した剥片が多いことから遺跡内で生産されたものと判断できる。このように基部加工ナイフは黒曜石を含む多様な石材が利用されている。また今峠型ナイフに使用されている頁岩は宮崎で多く出土しているものに類似している。なお三稜尖頭器の破片と思われるものは混在の可能性を考慮する必要がある。

また宮崎県北牛牧第5遺跡第Ⅱ文化層では頁岩などを石材とする今峠型ナイフ形石器が多量に出土している。(図7)今峠型ナイフ形石器は、今峠類型や大坪類型のみでなく、両側縁を直線状に調整加工して基部を意識した「北牛牧型ナイフ」(秋成 2005)と呼称されるものも出土している。また石器群のなかには腰岳産と推定される黒曜石製のナイフ形石器も出土している。ここでも三稜尖頭器は認められず、少量出土した剥片尖頭器はより下層から出土しており調査担当者は時期

が異なると判断している。

このように剥片尖頭器石器群の次の段階は、剥片尖頭器よりも規格が小さく変容した基部加工ナイフと今峠型ナイフの石器群になる。この基部加工ナイフは桐木耳取遺跡例や西丸尾例から理解できるように、多様な石材が使用され各遺跡内で製作されており、剥片尖頭器とは決定的な違いとなる。また、基部加工ナイフと今峠型ナイフについては、今峠型ナイフのバリエーションである北牛牧型ナイフの形態・基部整形やその調整角度も共通していることが指摘でき、両者の違いは単に素材剥片の差異のみである。

打面を残す基部加工ナイフ形石器の出現は、これまで指摘されてきたように剥片尖頭器の変容であるが、遺跡に近い多様な石材を利用し各遺跡で生産しているところに大きな特徴があり、これは多種石材の活用及び石材消費的にも効率的な適応現象として理解できる。

今峠型ナイフの出現について、萩原博文はそれが瀬戸内技法の影響を受けたものであるとし、岩戸Dの今峠型ナイフをAT降灰直後の時期のものとしている。そして西丸尾Ⅷb層の今峠型ナイフは、出土している石核が瀬戸内技法が大きく変質したものであるとして、より後出ととらえている(萩原 2004)。これは今峠型ナイフが数時期にわたる(鎌田 1999)ものとしているのみでなく、南九州の今峠型ナイフは比較的新しいと解釈しているが、桐木耳取遺跡出土例から成立しない。今峠型ナイフの背面に石核素材の腹面が認められることもあり、瀬戸内技法との関連は以前から指摘されている(小畑 1995)が、その石核が剥片素材でも使用可能であり、石材の経済的な消費のために効果的であったものと推定できる。これは、剥片尖頭器と異なり厚手の剥片や分割礫を石核素材として使用できることで、限られた石核から多くの石器を製作するために活用されたものであろう。

打面を残す基部加工ナイフと今峠型ナイフの技術的共通性から、今峠型ナイフ形石器は剥片尖頭器以後の時期として考えるべきである。つまり岩戸Dの今峠型ナイフは混在の可能性が高いことを示唆している。

この時期の基部加工ナイフと今峠型ナイフを含む石器群は、遺跡近辺の石材を多用するが、今峠型ナイフに関しては在地石材の利用のほか、同時にかなり遠隔地の石材使用も認められている。これはヴェルム氷期の最寒冷期に向かう時期、頻繁な長距離の移動が行われるなど、行動領域が拡大したことを示唆している(宮田 2002)。

4 まとめ

本稿では南九州における最新の出土例を基にして、剥片尖頭器石器群と、その前後の石器群について明確

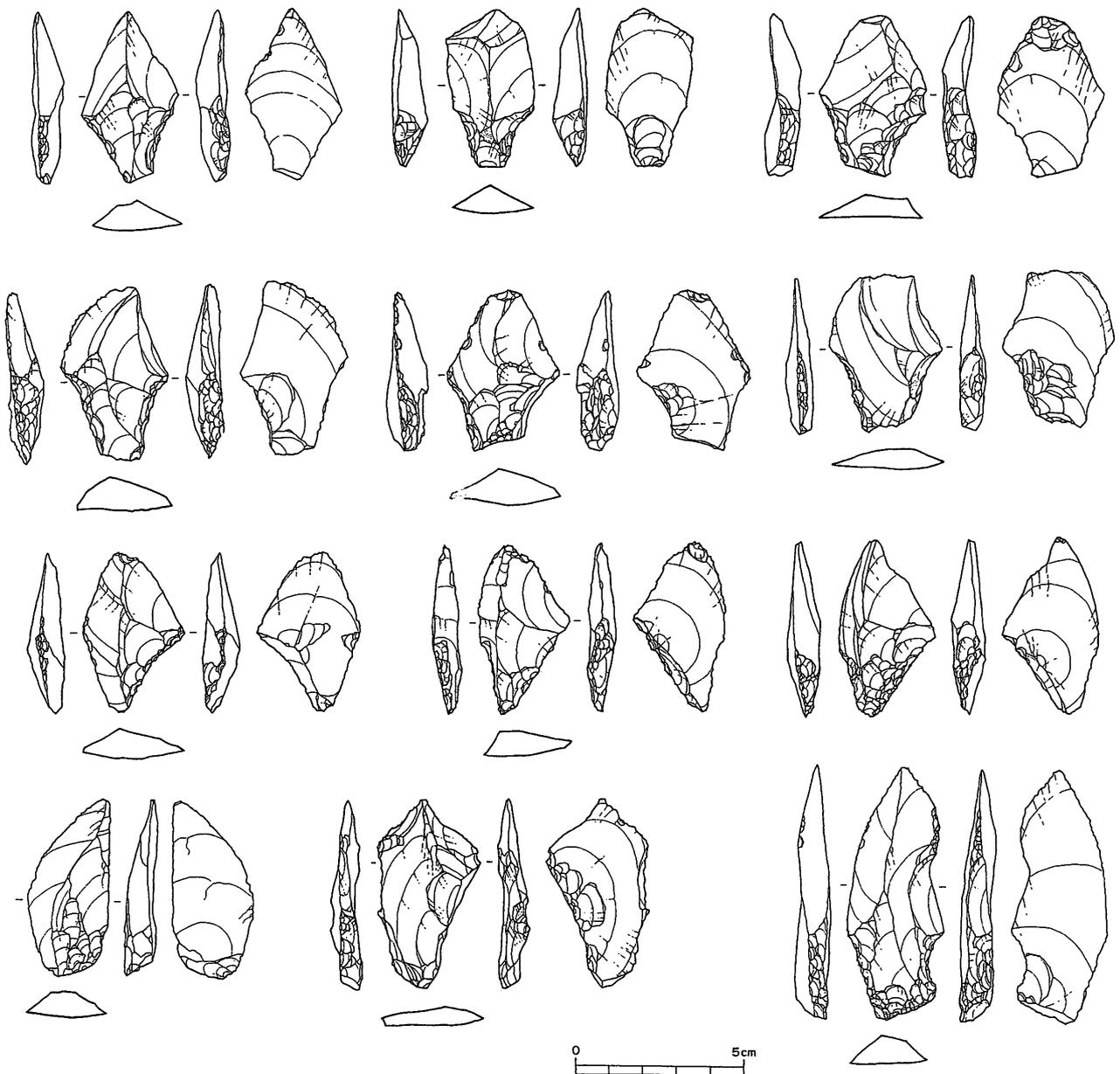


図7 剥片尖頭器以後の石器群(2) (北牛牧第5遺跡)

に区分し、変遷及びその背景を述べてきた。剥片尖頭器石器群の前時期は狸谷型ナイフ形石器を中心とする石器群であり、遺跡近辺の石材を利用し各遺跡内で製作していた。ところが次の剥片尖頭器石器群は、その主たる石器を安山岩などの特殊な石材を使用することから石器製作地は限定され、石器製作から使用まで複合する遺跡活動が必要であった。また技術的には大型の縦長剥片を生産する必要から石材消費的にもリスクが多かったことが予想される。

そのリスクを軽減する新たな手段として基部加工ナイフと今峠型ナイフの石器群が出現した。基部加工ナイフは、韓半島から波及し九州全域に拡散した剥片尖頭器が、技術的な変化により九州在地の石材に適応・同化したものといえよう。

また、基部加工ナイフと今峠型ナイフは素材剥片の形状が異なるが、剥片に施される調整加工や加工部位は共通しており同時期の極めて関連性の強いものである。

安斎正人は今峠型ナイフについて、それが「剥片モード系」であり、AT下位の剥片モード系に繋がるものとみなす(安斎 2000)が、それは技術的・形態的類似であり、今峠型ナイフは基本的に基部加工ナイフに繋がるものであると考えられる。つまり剥片尖頭器の技術的変容かつ多種の石材を使用するという石材的な変化が基部加工ナイフであり、その変容がアンチ石刃モードとして強く反発的に作用したものが今峠型ナイフと推定される。

この時期まで三稜尖頭器は共伴しない。剥片尖頭器

と三稜尖頭器との出現時期の違いについて、吉留秀敏は韓半島からの波及に関連して地理的に近い西北九州と、その他の地域との拡散に伴う時間傾斜を考慮し剥片尖頭器を含む石器群の後の段階では三稜尖頭器と同伴するとしている(吉留 2002)。しかし筆者は剥片尖頭器が主体となる時期と、三稜尖頭器が主体となる時期とでは基本的に重ならず異なると考えている。

本稿では、突然九州全域に拡散した剥片尖頭器石器群が、急速に幕を閉じ、新たに基部加工ナイフと今峠型ナイフが登場した要因の一端を、石材消費戦略の変化に求めた。もちろん他にも狩猟対象動物や気候寒冷化の進行などの要因も考えられ、それらに対する適応作用として石器群が変遷したと推定される。

5 おわりに

南九州には剥片尖頭器を含む石器群が多く検出されているが、その多くは時期が複合するものである可能性が高く、混在のない石器群かどうかを慎重に検討する必要がある。

筆者は石器群変遷をより細かく行うことが、当時の生業活動の細かな変化を読み取り検討するために必要と考えている。当時の生業活動を基本的に理解するには、使用される石器石材産地が細かく明らかにされる必要があり、そのためにも石器石材産地の追究をさらに進めていきたいと考えている。

【 註 】

- 1 筆者の九州東南部の旧石器時代編年は、昨年東京大学で開催されたシンポジウムにおいて発表しており、その内容は本年中に発刊予定である。
- 2 西丸尾遺跡の基部加工ナイフの一部について、当時剥片尖頭器の範疇で大きく捉えていた。しかし現在は広義で捉えるより、石器の変化を理解するために狭義で理解したいと考えている。

【参考文献】

- 阿部 敬 2005 「剥片尖頭器」はなぜ消えたか—後期旧石器時代後半期前葉から中葉の東南九州における技術構造の変容—『物質文化』79
- 安斎正人 2000 a 「台形様・ナイフ形石器石器群(2)—構造変動研究法の階層的秩序」『先史考古学論集』第9集
- 安斎正人 2000 b 「台形様石器と台形石器—台形様・ナイフ形石器石器群(3)—」『九州旧石器』第4号
- 稲原昭嘉 1986 「剥片尖頭器に関する一考察」『旧石器考古学』32
- 岩谷史記 1998 「狸谷V層石器群における特徴的なナイフ形石器について—狸谷型ナイフ形石器の研究—」『肥後考古』11
- 奥野充・福島大輔・小林哲夫 2000 「南九州のテフロクロロジー—最近10万年間のテフラ—」『人類学研究』
- 奥野充 2002 「南九州に分布する最近約3万年間のテフラの年代学的研究」『第四紀研究』41-4
- 小畑弘己 1995 『那珂 14』福岡市埋蔵文化財調査報告
- 鎌田洋昭 1999 「今峠型ナイフ形石器について」『人類史研

究』11

- 木崎康弘 1988 「九州ナイフ形石器文化の研究—その編年と展開—」『旧石器考古学』37
- 木崎康弘 1987 『狸谷遺跡』熊本県文化財調査報告90集
- 木崎康弘 1996 「槍の出現と気候寒冷化—地域文化としての九州石槍文化の提唱—」『旧石器考古学』53
- 木崎康弘 1994 「剥片尖頭器と石器文化について」(『九州旧石器時代関係資料集III 剥片尖頭器』)
- 木崎康弘 1997 「九州石槍文化の展開と細石器文化の出現」『九州旧石器』第3号
- 木崎康弘 2002 「九州石槍文化の南九州とその特徴」『後牟田遺跡』
- 草薙良雄・山田洋一郎 2003 『北牛牧第5遺跡・銀座第3A遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書80
- 桑波田武志・宮田栄二 1997 「鹿児島県における旧石器時代研究の現状と課題」『鹿児島考古』31
- 桑波田武志 2004 「ナイフ形石器後半期における南九州の狩猟具の様相」『九州旧石器』8号
- 清水宗昭 1973 「剥片尖頭器について」『古代文化』第25巻11号
- 橘 昌信 1990 「A T (始良T n 火山灰) 上位のナイフ形石器文化」『史学論叢』21
- 中原一成 2004 『桐木遺跡』鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書75
- 長野真一・大保秀樹 2005 『桐木耳取遺跡』鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書91
- 萩原博文 1996 「西南日本後期旧石器時代後半期における石器群の構造変容」『考古学研究』第43巻第3号
- 萩原博文 2004 「ナイフ形石器文化後半期の集団領域」『考古学研究』第51巻第2号
- 原田茂樹 2005 『牧内第1遺跡(四次調査)』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第104集
- 松藤和人 1987 「海を渡った旧石器“剥片尖頭器”」『花園史学』8号
- 松藤和人 1992 「南九州における始良T n 火山灰降灰直後の石器群の評価をめぐって」『考古学と生活文化』
- 宮下貴浩・角張淳一 2004 『箕作遺跡』金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書 18
- 宮田栄二 1992 『西丸尾遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 64
- 宮田栄二 1995a 「始良火山噴火後のナイフ形石器文化—南九州の石器文化」『始良火山噴火後の九州とその人びと』九州旧石器文化研究会 20 回研究会・シンポジウム資料集
- 宮田栄二 1995b 「移行期における石器群の変遷」『旧石器から縄文へ』鹿児島県考古学会
- 宮田栄二 2002 「南九州ナイフ形石器文化の集団と領域に関する予察—西丸尾遺跡を遺した集団の活動領域と移動」『九州旧石器』第6号
- 宮田栄二 2004 「剥片尖頭器と三稜尖頭器—折れと破損率及び使用痕からの視点—」『山下秀樹氏追悼考古論集』
- 宮田栄二 2005 「旧石器時代の編年的研究—九州東南部—」『公開シンポジウム 旧石器時代の地域編年とその比較』東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室
- 宮田 剛 2005 「鹿児島県内出土の剥片尖頭器から彫器へのリダクション例」『九州旧石器』第9号
- 綿貫俊一 1989 「今峠型ナイフ形石器の分布と地域差」『五馬大坪遺跡』
- 吉留秀敏 1997 「剥片尖頭器」『九州旧石器』第3号
- 吉留秀敏 2002 「九州における剥片尖頭器の出現と展開」『九州旧石器』第6号
- 吉留秀敏 2004 「九州地方の様相」『中・四国旧石器文化の地域性と集団関係』旧石器文化談話会